

Voluntary Association としての大正新学校の限界

小島 勝

——成城学園の動向を中心にして——

京都大学大学院博士課程

「大正自由教育」の十分なる展開は、既成の学校体系のもつ伝統的規範の枠を超越して、私立新学校の創設により成就されねばならなかつた。しかし、そこにはこの枠内での実現以上の困難が待ちうけていた。

確かにこの期に誕生した“大正新学校”は、

(1) 創立精神に共鳴する教師・父兄・児童生徒の“三位一体”による理想的学園の建設

(2) 教師の就任・脱退の自由、児童生徒の入学・転校の自由

(3) 公教育への批判を契機とし、それ故に公費に頼らず独立採算による学校経営

(4) 収益を目的とせず、教育にかける熱情

という点で、Voluntary Association: 自発的結社の要件を満たすものである。ここに集団の形成・運営・維持の面に重点をおいた分析により、大正新学校ひいては「大正自由教育」の実践的限界を指摘する途が開ける。4条件の充足には、初期の教育理念が多くの変節・曲折に遭遇したゆえに足りなかつたからである。

主な新学校には、成城女子学校・成城小学校・明星学園・玉川学園・自由学園・文化学院・児童の村小学校等があるが、ここでは代表として成城小学校の動向をとりあげる。

1. 組織の拡大と教育理念の堅持

大正5年(1916)10月、沢柳政太郎は小学校の設置と条件に、私立成城中学校長に就任。翌年成城小学校をその校舎に創設した。①個性尊重の教育、②能力高き教育、③自然に親しむ教育の副読本、④心身の教育の鑑賞の教育、⑤科学的研究を基とする教育を創設趣意として掲げた。これは希望理想にすぎず、主義ではなかつた。実

験学校・研究学校として出発したのである。しかし、この教育理念の透明性は早晩着色された。そこで、成城学園、乗鞍荘ともいって時代の変遷に伴う変遷過程が運命づけられていた。その重大な要因は、たまたま、組織の拡大に伴う問題である。

「小学校は私共、発意でありましたが、高等学校や高等女学校は全く親運の力で設けられ、唯私共がその教育を引受けたいという次第に他なりません。」(沢柳政太郎編『現代教育の管鐘』P2)

沢柳は、大正11年(1922)成城第二中学校、大正14年7年制高等女学校、翌年高等女学校が併設された専横をこう述べている。小学教育が最も重要と確信し、その研究成軍にかつた沢柳にとって、實際の経営にあたり、ついで小原国男が次々と上級学校をつくることに解意ではなかつた。しかもあらず、後援金が高等女学校設立にあたって「學に私共児童の爲にこれを熱望するばかりではなく、所謂成城式、教育を七年制の中等教育に拡張すること、やがては我が中等教育を改善するの端を開く所以であると確信するが為であります」(大正14年後援金募録)；下線部分は「トル」として削除の旨明記してある。)として、よりに成城精神の貫徹と、反映として、試験準備をしたが、身構は、拡大への道を歩ませた。しかし多くの父兄の望みは「中等教育の改善」よりも子弟を専横に入学させることにある。7年制高等女学校にほどき、所以であり、それが実際の組織の曲部膨脹を促すことになった。

組織の拡大に伴う多様な要求、産出は、“三位一体”による理想的学園の建設に困難に導く。果たせるか否を本は、昭和8年(1923)の「成城事件」となって現われた。小原校長、辞任を引

めようとす「小原派」と三沢科校長と交際す
 「反小原派」と。分限科身は、小学校児童600名
 の分の2が退学取次、反小原派職員、辞職い
 う学園未嘗有の危機を招いたのである。自らの教
 育理想の実現を求めてやまない小原は、父老の子
 弟からの脱出と成城ではできない新しい子弟の教
 育のためにすでに昭和4年から玉川学園、設立程
 管に踏み切つてしたが、玉川経営に専念すべく辞
 任したのである。しかし成城の「小原」ワゴン
 経営ぶり、職道、父老、児童生徒の間に熱烈な
 支持者と同時に批判者を生んでおり、決断を
 後、その打撃は爆発した事件であった。

そしてこれを契機として「初期成城、精神の変
 化をみる」である。昭和10年(1935)発行の『成
 城学園案内』は、「一貫校風刷新」を以てして
 次のような項目をあげている。(1)団体観念、養成
 徹底、(2)団体的訓練の強化、(3)自学比重の是正、
 (4)研究、気風、振作、(5)規則的生活、訓練、(6)設
 備、充實、整備。そして、「11年やその次、次
 の個性尊重の段階を出て、これを本来的に社会化
 し、歴史化し、深化することによって、次、次
 の本来的個性尊重、個性深化の段階に発展した
 のである」(『成城学園五十年』p.130; 橋本晋著)
 とし、セントと案や自学法は廃止されたのである。
 概文化して成城学園は、本来的に個性、児童
 自身の中に社会化、歴史化、深化の方向を求めは
 なければならないにもかかわらず、事實上団体観念
 の養成をもってこれを代る論理のこの危機をク
 クと知らばならなかった。「大正自由教育」の標
 榜した理念の抽象性が、7アシステム体制下におい
 て容易に着色され、適応過程を争ふ柔軟性と階層
 とを具備していた好例であり、成城学園はこれに
 よって維持存続した。しかし、創設時、「希望
 理想」の高揚は最早みとるべくもない。

2. 知識階級による自発的結社としての

新学校の限界

そして、独立経営による経営である以上、相当
 額の月謝に支払わねばならず、これが新学校の担

手を創始するにせよ、T. 新奇な教育理想に憧
 れた子弟と違ふ層は、middle-middle or middle
 upperに位置する知識階級に限られ、苦働者、愚
 民への浸透は不可能であった。これを「自由教育
 理念の狭小と狭小」といえる。富国子弟の教育
 とあつた玉川学園にも、こうした児童は殆ど入
 学してこなかったのである。

たにこの「民衆」の遊離傾向を存せしめるの
 知識階級であるが、日本の場合、近代化のため
 階級として産出、温存と許され、本政に、優越感
 による隔絶を生じ自らを部分社会に固定し、
 理想生活に没着した閉じ居ることを好むこと
 があった。「自由教育」はこうした活動した知識
 階級に存在意義を具せしめ、その理想遊離傾向
 中で独特の模範を播いたのである。が、それ以上に
 流布することによって、そこに生活端方、生活学
 校、北方性、新興教育運動にとり替はれる原因
 があった。

3. 運動としての高揚に与つた「自由教育」
 しかも、創設者、個性が強く反映した「新学校
 の経営は、「運動」としての統一性、高揚と好む
 た。独自の主張をもつて創設者は自己の牙城の構
 築に努め、それに共鳴する教師、父老、児童生徒
 も牙城情、提揚の必要感を覚えることなく、それ
 自身の自発的結社の中心「自由教育」の達成が可
 能にせられたのの趨勢があった。成城学園から、
 明星、玉川、昭和、清明、和光学園が分かれて経
 営されたのも、宝映著、強い個性もたらしめた
 のであった。その意味で、「大正自由教育」は、
 児童、自発性に着眼した「児童、発見」であつた
 と同時に、教師自身、積極的な教育実践と自覚を
 求めた「教師、発見」でもあった。しかし、この
 色彩豊かな自発的結社の形成と相互連環、弱きは
 折をなしていった。